

宗教人類学からみた子ども ①

怪物の話

関一敏



大学に入った頃、「非日常」という言葉があたりを飛びかっていた。タテカンやビラ、雑誌、テレビ、本のミニコミからマスコミにいたるメディアのあちこちで「非日常」にぶつかっていた。それは「失われた世界の復権」(山口昌男の名はこの論文名とともに初めて知った)と

して、祭や政治運動、演劇、詩、生活のさまざまな領域での何か革命的な、あるいは超越的なものの到来を意味するものようであった。しかし、どうしても分らないのは「非日常」という言葉がたんなるアジでないとするれば、それが何を一体意味して用いられているのか、そもそもこの概念に何かいいところがあるのかという笑うべき疑問だった。だから次の一節には、祭のことを考えはじめた大学院時代の思いのたけをこめて傍線をひくことになった——「これまでの祭理論の弱点であった『非日常』の解釈のあいまい性と、さらに、時間論との関係において祭のなかの矛盾の併存をみとめようとした多くの説の不十分さ……」(柳川啓一「祭にひそむ二つの原理」『公評』一九七三・九)。あいまい性と不十分さは、今もさして変わらない気がする。ただ、十九の春を「非日常」という言葉にもっていかれたこちらとしては、もう少し具体的に、もう少し論理的に、ということはあるに「非日常」を物語ってみなければおさまりがつかないのだ。

畸形の動物や人間たちは何処からやってくるのか。この問いかけは、十九世紀近代畸形学の胚胎成立以前に数多くの博物誌、医学誌的著作を生んできた。なかでも十六世紀フランスは実り豊かな畸形と怪物論の時代として、さまざまな動物分類論、怪物原因論、図版集を残している。

そのなかの一冊に『怪物と不思議』と題する一五七三年の本がある。ヴァロア朝末期の王室外科医、アムプロワーズ・パレ（一五〇九―九〇）の作品である。版ごとに増補改訂を重ね、生前は四版（一五八五）を最終稿とした。現在入手しうる校訂本も四版の復刊である（Am-broise Paré, *Des Monstres et Prodiges*, éd. critique et commentée par Jean Céard, Genève, 1971）。全三十八章に図版八〇余枚を配した一種の図鑑であり、校訂者はこれをパレの「絵本」とよんでいる。絵本とはいえ、あるいは絵本の名にふさわしく、内容はなまなかのもので

はない。パレの眼をとおして時代のフランス文化が「畸形」「怪物」の概念にくくりあげた人間や動物たちの姿態が、その身体的変形、部分結合、異種混合の因果論とともに陳列されている。異常形態の神学的・医学的原因がことこまかに分類説明されている叙述のあり方は、むしろ因果、漸とよぶべきかもしれない（二―三三章）。パレの蒐集範囲は、想像上のものとも実在動物の伝承の変形ともつかない陸・海・空の巨大生物にまでおよぶ（三四―三六章）。これら異世界（アフリカ・アジア）に棲息するとされる怪物にはワニ・サイ・ゾウ・カメレオン・キリン・ダチョウ・鯨などが含まれていて、その博物誌的知識のもつ世界への広がりと限界をあらわにしている。

2

パレによって分類された怪物原因論のしくみをみてみよう。（一）は章立てである。

- (1) 神の栄光を讃えるため
- (二)
- (2) 神の忿怒を表わすため
- (三)

- (3) 精液の過剰(四―七)
- (4) 精液の不足(八)
- (5) 母親の想像力(九)
- (6) 母胎の狭窄(十)
- (7) 母親の姿勢(十一)
- (8) 母胎へのショック(十二)
- (9) 遺伝・偶発事故(十三―十七)
- (10) 腐爛(十八)
- (11) 精液混交(十九)
- (12) エセ異常(二〇―二四)
- (13) 悪霊(二五―三三)

一見して実に雑然とした配列であり、パレの分類原理にはいくつかの異なった系がいりまじっている印象をうける。これをかりに三つに分けると、超自然的(1)(2)(3)、自然的(3)~(11)、人工的(12)ということになる。われわれの目からすれば、この三類型にパレの三つの顔を、つまり神学者・医者・道徳家のそれぞれを割りふつてみたい気がする。校注者セアールによれば、パレの分

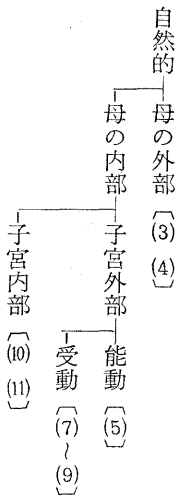
類にはかならずしも網羅的な狙いはなく、怪物誕生には複数の原因が同時にかかりうるものとみなされていた(「序文」)。たとえば一二五四年イタリアのヴェローネで記録された人頭馬身の「動物」は「神の怒り」(三章)の産物であると同時に、「精液の混交」(一九章)の結果でもある。また男となって魔女と交わる魔魔のしわざ(二八章)は、同時に消化不良の肉と強いワインが神経組織を狂わせた結果として医学的見地からも説明されている(三三章)。つまり「ヒポクラテスのいうように病気には人智のおよばぬ何か神聖なものがあり」(59頁)、「驚嘆すべき隠された神性が怪物にはみいだされる」(68頁)のだが、そうした超自然的な働きはいっぽう自然的原因によっても説明しうるものとみなされるのである。このことは、自然の働きがその背後にある超自然の意志を反映するというパレの一元的宇宙観をものがたるものだろうか。異種動物間の交わりは神の怒りをよび、それにふさわしい怪物を生むというふうだ。しかし、とすれば人工的怪物とは何を意味するのか。三四章以下の陸海空の巨

大生物は何のために列挙され、また自然的怪物(3)~(11)の諸項目の配列はどう考えればよいのだろうか。

3

まず(3)~(11)の自然的・原因の配列をみてみよう。精液の男性原因と母胎の女性原理が順不同に並べられているようにみえる。精液の項目をみると、(3)過剰・(4)過少・(11)混交の三つがある。精液の過剰は胎児の身体的過剰を生み、過少は身体的欠損を生む。前者にはシヤム双生児、双頭の女性、腹にもうひとつの頭をはやした男、半陰陽、男に変性してしまった女、後者には体の一部(四肢・頭)を欠いて生まれた男女のさまざまなバリエーションがあげられている。量的な多寡に加えて、清液の混交は異種複合の異常形態を生む。半人半獣(人と犬、人と馬、人と豚)や異種結合体(ニワトリと犬)がその例である。これらの三原因はそれぞれに対応した結果としての怪物の三形態を生む、とパレは考えていた。怪物の形態学(「怪物形象はどのように組みあわされるのだろうか

か?」)であるならば、十八世紀博物学者デュッフォンの三法則は右のパレの原因論に呼応しているだろう。いわく、「過剰」、「欠如」、「部分の転倒もしくは誤れる配置」。けれどもパレの博物学は形態学的分類に自らを縮少することなく、形象からその生成原理にさかのぼろうとしていた。この胎生の因果法則ともいうべきパレの志向は、(3)~(11)の一見バラバラな項目配置にもよくあらわれている。校注者セラールは別の本で、精液の三項目のうち(11)混交だけが何故うしろにまわされているのかと問い、それは外から内へと移行するパレの視点の動きではないかという(J. Géard, *La Nature et les prodiges*, Genève, 1977, p. 306)。



つまり女性の体を中心にして、外からくる諸原因から内在する原因へと順次におしすすむパレの眼の動きがこ

ここにあらわれている。内から外へ、子宮から産道へ、そして外部の現実世界へと生みだされる怪物の産出行程は、こうして遡行的に外から内へと入りこむように解剖される。パレにあってこの運動は、徴候から病をよみとる医学的解読と、現象から神意へとむかう神学的解読を重ねあわせるものであるだろう。

4

しかしながら、パレの科学と神学は一方が他方をすっぽり包みこむ同心円を構成していたといいきることは難しい。両者はむしろ楕円の二つの中心のように引きあい、分離しようとしていた。超自然がつねに自然を媒介として自然において神意をあらわすとすれば、超自然の表出に不可欠なものとして自然が認識の前面へとおしだされ、やがて自然そのものの驚異が超自然を置き去りにする離脱運動へといたる。事実パレの生きた十六世紀は、宗教改革と印刷術の発明普及という社会文化史的大変動期にあって、神の不思議が自然の驚異へとその意味

づけを変えつつある時代だった。宗教改革初期にあって神の恩寵の印とみなされていた自然変異（地震・噴火・洪水・天空奇瑞・血の雨・石の雨）や怪物の誕生は、十七世紀において小伝統的民衆文化をのぞいて自然そのものの不思議とみなされはじめていた。大伝統は小伝統を迷信視しつつ、「神意の究極因」よりも「自然科学的説明」によって「意志をもった自律的存在」としての自然をとらえようとしていた（K. Park & L.J. Daston, "Unnatural Conceptions", *Past and Present*, n° 92, 1981, 8, pp. 23-435）。この趨勢はさらに自然のまどっていた「超自然的オーラ」をとりのぞき、読者を驚かせ楽しませる趣向を生む。パーク&ダストンによれば、これこそがパレの本の末尾に陸海空の狂奇な生き物博物誌の収められた理由にほかならない。すなわち「興味の世俗化」である。パレ自身、次のようにいう。「実のところ私はといえば、自然はその造形の偉大さをわれわれに驚嘆せしむるために戯れたのだ、というほかない」（一三九頁）。

パレの科学と神学はこうして自然現象の究極因を自然

そのものにもとめるか、あるいは背後の超自然にもとめるかという二つの運動を示している。ここで注目したいのは、そのいずれにおいてもパレの怪物への関心が自然現象の調和性への信頼にもとづいていることである。すでにみたように怪物の形態はその原因類型に照応し、原因の類型はそこに想定された規範的秩序からの逸脱として考えられている。過剰、欠如、変形、混交は宇宙の（時として神の、時として自然の）調和的規範を破るものであり、そうした規範的法則（自然法則、道德法則）や規範的種類からの逸脱もしくは侵犯は、規範的身体の逸脱としてあらわれざるをえないのだ。こうしてパレの怪物論がその調和的宇宙観とうらおもての関係にあることは、じつはこれまでふれなかつた非自然的な二つの怪物原因（人工的・超自然的）のとらえ方にいっそう明らかである。

5

人工的原因には畸形や病をかたる乞食・放浪者の例が

あげられて、パレはこれを激しく批判していた。たとえば首吊りの屍体から切りとった腕を肩からぶらぶらさげて腕が腐ったようにみせていた男（二〇章）、乳房にニセの腫れものをつけた女乞食（二一章）やニセ癩病患者（二二章）、尻からインチキなはらわたを出した男（二三章）など。これらの人工的怪物は追放・処刑にふさわしいとするパレの批判には呵責ない激しさがこめられている。正常の宇宙調和が神意の（もしくは自然の）意志の反映であるならば、異常の存在もまた逸脱としての神の（もしくは自然的）意味をもつものである。これを人間が作為的に模写することは、したがって神（もしくは自然）の冒瀆であり、調和的種類の意図的攪乱であるのみならず怪物的形象のもつ意味をもそこなうものである。

この主張は、超自然的原因のなかで魔物と魔女のとらえ方に再現されている。デモンもまた神の恩寵・忿怒にもとづくはずの異常出産を作為的に模写する者たちである。「サルは滑稽で子供にとつてはすてきな存在であり、笑いの気晴しになる。人間のふるまいを真似ようとして

それが出来ずに、しかも見る人々を嘲笑うようにみえる」。セラールはこの一節をパレの他の著作から引いたうえで、エセ乞食やデモンにたいするパレの強い否定感情には、「ものまねへの恐怖」があるという（「序文」43頁）。デモンが忌避されるのは、人間にも動物にも化けられるような流動的な身体をもち、幻を現実ととりちがえさせる「神のサル」のあり方である。さらに魔女といえはこのデモンをサルまねするのだから、それこそ「神のサル」のサル」という二重のサル性を帯びることになる（45頁）。

デモンの否定は、だから神／デモン＝善／悪という道徳的二分法によるのではない。神もまた怒りによって不幸をもたらし、兆としての怪物をこの世に誕生させるだろう。問題は神意にもとづく不幸や変異にはそれなりの理由があつて、人智にはかり知れぬ面をもつとしても宇宙の神義的調和はたしかに保証されていることだ。ところがデモンはこの調和をパロディによって揺さぶり突きくずす。あるいはこう言いかえてもよい。デモンはやは

り悪である。何故なら、それは規範と分類の網の目をサルまねによって攪乱し、境界性を不明確なものにしてしまふのだから。あるいはこうもいえるだろう。時代の百科全書の知識の拡大は旧来の動物分類に収まりきれない生き物の情報をもたらす。パレの試みはこれらの怪物によって崩壊の危機に瀕する宇宙的調和観を医学的な知をもって再建することだった。この試みを最も阻害するのは、始末におえない畸形や怪物形象そのものではなく、本当の異常とウソの異常をまぜこぜにしてしまう人間やデモンの作為だった、というふうに。してみると、パレのサル批判には個人と時代の嗜好では片づけられない根源的な意味が考えられるはずである。何故、動物分類を逸脱する怪物よりも、逸脱を模倣する攪乱が悪とみなされるのか。

6

ここでわれわれは、デュルケムとモス『分類の未開形態』（一九九三）以来の民族学的課題である「分類」の

問題にひきこまれることになる。動物分類についていえば、たとえばE・R・リーチ（『言語の人類学的側面』、『現代思想』一九七六・三）とP・ブーイサク（『サーカス』せりか書房、一九七七）を読みくらべることで、分類の逸脱部分のタブー原理と、分類体系そのものを攪乱するサーカスの動物芸のしくみを知ることができる。ここでは動物たちの命名、衣裳、ふるまいによって動物の人間化が演じられる。人間／動物を隔離するところに成り立つ動物園のシステムがその時代と社会にふさわしい差異の分類体系を集約しているとすれば、サーカスの動物芸は異種間横断的な結合原理によってサルまねの攪乱をひきおこすのである（同一一―一六六頁）。

怪物と分類の話は、リーチのいうように魔女信仰の社会史へとわれわれをひきよせもすれば、中沢新一が物語るように文化の胎生学へと一気に突きぬけさせもする（『ゴジラの来迎』、『中央公論』一九八三・十二）。今回の話は、けれどもこのあたりでしめくくらなければならぬ。感想をひとつ付け加えておこう。

出産の「異常」についてはさまざまな文化の博物誌、民族誌、民俗誌が積み重ねられてきた。怪物的形態ではなく、出産過程の例として、逆子、歯の生えた子供、生まれる時に排泄する子供、双子……。双子の問題は記号的には差異を混乱する要素として、サルまねの恐怖を生ずる出来事としてとらえられよう。してみると、もっとも恐ろしい存在は、過程の異常が形態の異常とともにやってくることで、つまり双子の怪物ということではないだろうか。

〓この項終り〓

（筑波大学）

著者紹介　せき・かずとし　フランス、ベルギーをフィールドとして活躍する新進の宗教学者。幽霊研究会のメンバーでもあり、近年は、日本の神霊現象にも着手。本連載を通じて、聖母、子ども、騒霊の息吹を、存在と仮象の渦巻く、あなたこなたから、時を超え、国を越えて届けていただきます。